

日本分子生物学会 キャリアパス委員会主催 ランチタイムセミナー2022 研究室の働き方改革 ~with コロナ時代のネクストスタンダード~

- 日 時：2022年12月1日（木）11：45～13：00
- 会 場：幕張メッセ 国際展示場 第14会場・オンライン
- 司 会：倉永英里奈（東北大学大学院生命科学研究科）
（参加者：175名）

○司会（倉永英里奈） それでは定刻になりましたので、ランチタイムセミナー2022「研究室の働き方改革~with コロナ時代のネクストスタンダード~」を始めたいと思います。セミナーの進行は日本分子生物学会キャリアパス委員、東北大学の倉永が務めたいと思います。皆さん、どうぞよろしくお願いたします。（拍手）

最初に、会場の変更があり皆さんにご迷惑をお掛けいたしましたこと、この場でお詫びしたいと思います。もとの会場から少し離れているのですが、時間通りにお集まりいただきましてどうもありがとうございます。皆さんの関心の高さをこれで私もビンビンと感じまして緊張感がさらに高まっていますが、サクサク進めていきたいと思います。

今回のランチタイムセミナーを企画するにあたりまして、キャリアパス委員会でいろいろと議論してきたのですが、特に若い方々がどういうことを知りたいのかなという視点を大事に考えました。多くの研究室がそれぞれの目標に向かって日々努力をしながら研究を進めていると思いますけれども、その目標を達成するためには、基本的には面白い研究をして面白い発見をして、そしてそれらを発表していくこと、分子生物学会の年会のような場で発表していくということが大事だと思います。ただ、それをどういうふうにして効率的にやっていくのかということは、研究室でそれぞれが様々な工夫をしているものと推察しています。

推察というのは、隣のラボで何が起きているのかなかなか知る機会がない、というのが私たちの研究現場のリアルであると言えるように思います。それで、特にここ数年のコロナ禍を経まして、よその研究室でどういうふうにしていくのかというのは結構気になってきたのですね、私自身も。あっちのラボでは今セミナーをオンラインでやっているのかな、もうオンサイトですかとか。ラボ旅行をどうしていますか、飲み会どうしていますか。どういうふうにしてコミュニケーションを取っていますかとか。

そこで、それに対する工夫、うちの研究室はこんなすごいことをやっているんだぞ、みたいなことをぜひシェアしていただければと思ひまして、8月に事前アンケートを実施いたしました。結構自由記述が多くて、皆さん時間をかけて回答してくれて大変だったと思いますが、それぞれの方々に熱量があるんだなと思って、たくさんの自由記述のコメントも含めて事前アンケートの結果として紹介していければと思います。

このコロナ禍を機に始まった新しい工夫、これまでに考えてもなかなか実施できなかったことがすごく多くあって、それらを実施するいい機会だと思ひます。今回のランチタイムセミナーは「with コロナ時代のネクストスタンダード」と打ちましたけれども、そこまで「これをやったほうがいいんだぞ」みたいな結論を求めるようなものではなくて、私のメンタリティー的にはもっとマイルドに、昨日までは11月だったので「秋深き隣は何をする人ぞ」ということで、松尾芭蕉が晩年に床に臥せって詠んだ句なので、これから晩年になっていくというわけではないのですが。自分が non-PI だったときに PI のある先生から「PI って実は結構孤独なんですよ」と聞いていて、最近それをひしひしとを感じるようになりま

した。その理由が何なのかと思ったときに、やはり情報のシェアがなかなか研究室間でないということ、このコロナ禍で特に感じるようになったんです。それで他の研究室ではどういうふうにして動いているのか。それをそうしなければいけないというわけではなく、いい取り組みがあったら、それを取り入れていければいいなと感じました。

この 17 字の短い俳句の中に松尾芭蕉の句意は込められているわけですが、私たち聞く側にとっての受け取り方はさまざまです。私たちの環境の中ではそれぞれが孤独で、コロナ禍も特にありましたから、その孤独さを通じてつながり合うことで生まれる連帯感というものを共有していければと思って、このランチタイムセミナーを企画した次第です。先に言い訳が入りましたけれども、皆さんシェアするということを考えながら、ぜひコメントをいただければと考えております。

立場や年齢による違いとか、理想と現実とか、割と細かいカテゴリーで聞いてみました。たくさんコメントをいただきましてありがとうございます。イントロダクションとして、まず事前アンケートの概要からご覧いただきたいと思います。

今回、学生の回答が実は少なめでした。やっぱり隣の人のことを知りたいのはPIが多いかな、孤独ですからね。ですから、PIがたくさん答えました。女性の割合としては約3割で、分子生物学会の会員の女性比率が、学生は高めですが、正会員は少なめですので、ちょうど3割ぐらいということで、そこまでジェンダー差はなく、それぞれに回答していただけたと思います。40代、50代、まさにこれから研究室を運営していこうとする方、運営している方に特に興味や関心を持って答えていただいたということになると思います。

どういうことについて質問したかということで、事前アンケートに答えていない方もいらっしゃると思いますので、ここで簡単に説明します。コアタイムについて、テレワークについて、研究ディスカッションについてどのようにしているのか。研究集会にどのぐらい出ていて、どういうスタイルがいいか。学会事務局の方々もどういうスタイルがいいのかというのは特に関心を持っていらしたので、ここを聞きました。共同研究の実施についても、キャリアパス委員の中でどういうふうに効率的にやるのかというのを知りたい人もいましたので、これも聞きました。あとは、研究室外での活動、プライベートについて、これは個人的にどういうふうにしてコロナ禍で過ごしていたのかというのをバッファ的に聞いてみました。あとは、所属する研究室とかラボ運営のコツもそうですけれども、どういう方向を目指して何をやっていますかということについて自由に記述していただくということをメインにやりました。

大変ご協力ありがとうございました。すごく大変だったと思いますけれども、コメントをたくさんいただいております。ただ、時間の関係上全てを紹介することができませんので、できるだけ紹介していきますが、紹介できなかったコメントがありましたら、すみません。あとで自由記述でコメントを出していただきますので、そういうところで「これはぜひみんなシェアしたい」ということで出してもらえればと思っています。

まず最初にコアタイムについての質問への回答です。ただし書きとしまして、コアタイムというのは労働契約上のコアタイムというのはもちろんあるのですが、学生にとっては「何時から何時まではラボにいて実験していてね、私たちがアクセスしやすいように」というふうにしてコアタイムを設定しているラボがありますので、そういうものがあるのかなのかということについて聞きました。意外と「ない」という回答のほうが多かったです。「過去にあった」という場合はもちろんコロナ禍前後で変わったのかな。これはどういうふうに皆さん感じていらっしゃるかわかりませんが、そして、学生のほうは「ある」が半分「ない」が半分。PIは「ない」が1.5倍ですね。なので、もしかしたらPIは設定

していないのだけれども、割と無言のプレッシャーみたいなものがあって、コアタイムがあると感じている学生もいるのかもしれませんが。

自由記述で、60代PI「研究にコアタイムはない」。おっしゃるとおりでございます。これで終わってしまいますので。40代のPIの方から「自分のことや家のこともちゃんとできる時間を確保しないといけないので、コアタイムを設定されると困るケースもあるけれども、この時間は人とディスカッションができますよという時間を取ってもらえるのは非常にありがたい」という意見もありました。

細かく聞いております。コアタイムがあると回答された方に「うまく機能していますか」または「うまく機能していましたか」について聞きました。だいたい半数ぐらいになります。特に自由記述のコメントのほうでお話ししていきたいと思えますけれども、コアタイムを設定する目的とか、そういうことについて意外と学生側もちゃんと理解しているということが、こちらの自由記述のほうにあります。「社会性を身につけるならばあったほうが良いと思います」とか、「研究する時間が強制的にできるためにはかどります」、あとは「研究室に配属されて1、2年はやっぱり研究生活の型みたいなものが慣れないので、こういうコアタイムがあったほうが良いです」というケース。また、教員側にとってみたら「過剰な労働を防ぐ逆コアタイムが必要」という意見とか、自分の時間をつくるためのコアタイム、「コアタイムが終わったら帰りやすい」という意見も実はありました。学生にとってコアタイムを設けているのかがよくわからないという意見もありましたので、ぜひコアタイムを設定するときにはその理由も含めて解説することも、コアタイムを守ってもらうためには必要なかなと思いました。

コアタイムがあるという場合に「コロナ禍で変化がありましたか」ということで、意外と「なかった」というケースが多かったです。コアタイムがなかったというラボが多かったのですが、あったというラボでコロナ禍の変化がなかったというラボが結構あったのは、割とうまくコロナ禍でも感染対策を取ってしっかり研究活動を維持していくために工夫されているのかなということをおもいました。

コロナ禍で変化があったというラボにおきましては、それがよかったか、よくなかったか。結構「よくなかった」という意見がありましたので、やはり研究活動を停止したということが1つの理由なのかなと思えます。ただ、こちらのコメントで40代PIの方が書いていらっしゃいますが、「学生とか院生、ポスドクにとってはコアタイムというのは有益なので、それができなくなったというのはよくなかったのかな」。PIは「コアタイムがコロナ禍で変化してテレワークが増えたということで、意外と家でできる仕事が多い。ほとんど家でできるなということが気づけたということがよかった」ということもあります。こちらに出しているコメントについては、皆さん興味のある方がいらっしゃいますので適時読んでください。

今、テレワークについて、PIは「テレワークが家でできるなということに気づいた2年半でした」みたいなことが書いてありましたが、テレワークについて情報系のラボではすでに導入されていた方々もいらっしゃったと思います。今回のコロナ禍でテレワークを導入されたラボがかなり多かったと思います。けれども、意外と取り入れていないというラボは多いです。研究室の中で情報をシェアするのに、家で何か作業できることについてはテレワークでやってくださいということもありますけれども、「やっぱり生きものを扱っているのでウェットではテレワークは難しい」。それはそうですね。実験するにはなかなか家ではできないですし、遺伝子組換えの生きものを家に持って帰ることは絶対できませんので、難しいとは思いますが。ただ、この30代PIの意見ですけれども、「ライフワークバランス、会議が多くなる場合には会議は家で出られる」ということで、子育て世代とかそういう方々にとってテレワークは有効活用できるようなシステムだったのではないかと思います。

テレワークについてですが、それがうまく機能しているか、していないかということです。テレワークを導入されている場合というのはもちろん「している」し、過去に導入されていたということは今は導入していないので機能していなかったから導入を見送ったのだと思います。もしくは、やむを得ず導入していたというケースです。うまく機能しているというケースは情報解析のみ行ってというケースはあるかなと思います。ただ、実験の進行とかに際しまして教員とディスカッションしながら進めていくというケースは、どうしても実験の発展性に少しブレーキが掛かったりすることがありますので、学生のうちは少し教員とのコミュニケーションが取れるほうが良いということを感じました。

今、コミュニケーションという話をしましたが、研究ディスカッションについてラボではどういうディスカッションの方式を取っていますかというのが、こちらの質問です。これはそのときにコロナ禍ということとは関係なく、どれぐらいの頻度でどういう形式でやっていますかという質問になります。ラボミーティング、ラボ全体のミーティングはもちろんやると思いますが、それでも、「個別の定例ミーティング」および「データが出たらその都度直接突撃する」というケースです。グループミーティングとかもあるかなと思います。そういうところ、割と満遍なくミーティングを取り入れているケースがあると思います。「現在のディスカッション体制が良いと思う」割合が多かったので、今やっているスタイルというのは割と学生たちにも受け入れてもらっているのではないかと思います。週1のミーティング、個別の定例ミーティング、いろいろなケースがあると思いますが、あとでこちらのほう、現場のアンケートでももう少し詳しく聞いていきたいと思っています。

コロナ禍でディスカッション体制に変化はありましたかという質問で、「あった」というケース、「なかった」というケースは半々ぐらいになりました。学生側にとってみると「なかった」というケースのほうが多かったです。それがよかったと思うか、よくなかったと思うか。あった場合に「よかった」と思うケースが学生の割合は非常に多かったです。結構オンラインツールを使うようになって先生とのアクセスがしやすくなったというケースが「よかった」という意見には多かったと思います。

その中でも「直接突撃してほしい」と教員の先生は思っているのですが、学生にとってはめちゃくちゃ忙しそうにしている教員の先生に気軽に相談できる状況ではないということ結構感じている人がいて、これは複数コメントがありました。教員側は、学生は常に持つてくるべきだ、データが出たら持つてくるべき、自発的に話をするのが大事と言っているのですが、なかなか壁があって、そこがアプローチしにくい。30代のPIの方、若くてPIになれた方は「どんなに忙しくても学生を優先しています」ということをわざわざ書いてありますので、ちょっと身につまされるというか、参考にしなければいけないというふうに私自身、感じました。

研究ディスカッション以外のコミュニケーションについて。コミュニケーションというのはPIとのコミュニケーションとは何だと思いますか、雑談とか、「最近どう」なんていう会話をどういうふうにしてやりますかということだと思います。直接突撃するのに少し躊躇するとか緊張するというケースはオンラインでDMを流すことができるようになって割といいな、と。Slackというのはコロナ禍になって私もすごく使うようになりました。学生とDMを交わしやすいというのはすごくいいなというふうに感じています。

コミュニケーションが減ったというか、雑談、「ちょっと会ったときに話をするということができなくなった」というので、実験上ヒヤリハット事例、事故が起こるケースが頻発するようになりました」という、現場の意見をいただきました。ここら辺細かく見ることができなくなっているということを感じますので、そこを皆さん参考にさせていただければと思います。「雑談は重要」ということはすごく書いて

あります。一番最後は50代PI「プライベートに無駄に深く立ち入ったりしないようにしている」。これも大事だと思います。最近は何んちゃらハラスメントとかありますので、そこら辺は気をつけましょう。

同僚とのコミュニケーション、さっきはPIとのコミュニケーションでしたけれども、同じレベルの人たち、学生は学生同士とか、学生と教員というところでコミュニケーションの仕方についてです。コロナ禍で変化がありましたかということで、結構「あった」という人が多いです。飲み会がなかなかできなくなったというのはすごくあるのかなと思います。新しく入ってきた人たちとそういうコミュニケーションを取れなくなるということは、新しく入ってきた学生がお互いを知らない、信頼関係はそういうところからも構築されていくのかなと思います。「ドロップアウトするリスクを減らすと思います」というのは20代大学院生、博士の人の意見です。なので、こういう学生からの意見は大事なところかなと思いますので、持ち帰ってもらえたらいいなと思います。「研究者も人間なので気の合う、合わないはあるが、最低限あいさつぐらいはにこやかに交わせたらいいな」。そういう関係を保つことは大事だと思います。それは本当にそういうふうに思います。「こんにちは」を言ったりとか、「ありがとう、すみません」をちゃんと言う。そういうことが大事だと思っています。ということからコミュニケーションは成り立ちますよね。

少し話が変わりますが、研究集会の参加についてです。コロナ禍なのでほとんどオンライン、ハイブリッドは必須みたいなかたちになってきました。セミナーもそうだと思います。「オンラインになって参加割合が増えましたか、減りましたか」。ある程度予測はついていたような質問ではあったのですが、「少なすぎる」。研究集会の参加回数が少なくなりましたというケースはありました。オンサイトが少なくなったということでモチベーションが減っている。「参加するかどうかわかるようになります」というコメントもありました。修士の学生さんはオンラインでしかまだ参加したことがない。今回初めて学会、オンサイト来たという人はいますか？（手を挙げた学生がいた）楽しい？（学生「楽しいです」）いいですね。すごく得られるものがあると思います。ぜひ持ち帰ってください。貴重な機会です。

でも、オンサイトの良さもちろんあるし、オンラインの良さもあります。ハイブリッドは運営する側が大変。メリット、デメリットはあると思いますけれども、いろいろ工夫していければと思います。

「コロナ禍で学会参加に変化はありましたか」。結構ありましたね。参加回数も減りました。変化をどう思うか。「どちらとも言えない」が一番多かったかと思います。そもそも参加意欲というのはオンラインだとちょっと減りました。現地だと行って座っていなければいけないという強迫観念があって一生懸命聞くこともあるかと思います。集中力が続くとか。ただ、いろいろな仕事をしながらできるとか、家のこともやりながらできますよということで、メリット、デメリットの両方がありましたという意見になります。

共同研究についてですが、コロナ禍前後でもどういうふうにして効率的に実施していますかということです。オンラインでミーティングをして、実際に現場に行って実験をするとか、もう少し工夫をしながらやっていくということが一つなんですけども、やはり新しく共同研究を開始するという機会は激減したというのがコメントの中ではすごく多かったように思います。なので、実際に開始してからはオンラインでもいけるのですが、その開始するまでは機会が減ったかなということがありました。ぜひこういう対面の学会を利用して共同研究をいっぱい取り次いでいってもらえればいいかなと思っています。

ここからプライベートの変化になります。結構変化があったという人が多いですね。どういうことがプライベートで変化しましたかということで、あまり深く立ち入って聞くこともできないのですけれど

も、積極的に皆さん書いてくださいました。「家族で過ごすことが増えた」、いいことです。「研究室にいるが、研究に身が入らない」、それはプライベートでみんなで飲み会に行ったりとかしなくなったからということがあったみたいです。あと、企業の研究員の方も答えてくださっています。「たわいのない雑談がちょっと減りました。対面で会話することが少し躊躇されるような時代になりました」。「オンラインでの出会いが増えた」、そういうケースもあります。ただ、あまり長続きしないそうです。実際に見て会ってないとどんな人かわからないのでということがあると思います。「宴会がなくなったので、それを機に禁酒した」、心身の健康について次の設問で聞いています。

プライベートの変化で心身の健康についてどのような影響があったかということです。「健康診断の再検査を受けた」、よかったですね、どうだったのか気になりますけれども。「歩くようになりました」。結構風邪を引いたりとか、この時期は私もよくやっていたのですが、全然風邪を引かなくなりました。自分の体のことをよく考えるようになったかなと思います。また、「禁酒」が出てきます。「宅トレが習慣づいた」、いろいろ書いてあります。「ルーティンの仕事を割と効率良くこなすことができるようになった」というので、やはり自分の体のことがそんなに上下しなくなったということがあって、割とスタンダードに仕事をこなせるようになったということは私自身も思いました。「ペットを飼い始めた」、いいじゃないですか。

研究室が目指す先、理想と現実です。現在所属している研究室とあなたが理想と思う研究室の目指す方向はどちらですかということです。左側のほうは現在所属している研究室がどこを目指しているのか。一番多いのは「掲載ジャーナルのクオリティーは気にせず、オリジナリティのある発見を重視する」というところです。「次世代を担う若手を育成する」も多いですね。「社会還元できる発見をする」もある程度あります。「PIの言う通りにとにかく従う」もあります。ケースバイケースかなと思います。

あなたが思う理想の研究室はどちらですかということで、「掲載ジャーナルのクオリティーは気にせず、オリジナリティのある発見を重視する」と「次世代を担う若手を育成する」の2つはコンセンサスが取れていて、今の運営をどういう方向を目指して頑張っているかということ、理想というのは非常に一致しているケースが多いのかなと思います。

理想の研究室の中で自由記述では「心身ともに健康な研究室」、「教科書の1ページをつくるような体系だった学術的新発見を目指す」、「わいわいとサイエンスを楽しむ」、「各自の興味に従って研究し、周りのメンバーはそれを盛り上げる」ということです。ぜひ聞いてみたいということがあります。「研究の方向性をどこまでPIの考えを押し付けていいかどうか。PIも人なので相性が合わないメンバーも合うメンバーもいる中でどこまで平等にするべきか」、40代PIの方です。PIではない学生さんがここにいたら、自分の研究室の教授はこんなことも考えてやっているのかと思ってびっくりすることもあるかもしれないですけど、割と悩みながら研究室運営をしています。なので、何か話したいことがあったら話に行ってコミュニケーションを取ってあげるといいかなと思います。今のは質問でもありますので、これはこうやるといいよということがありましたら、ぜひコメントの中でお寄せください。

研究室が目指す先ということで、ラボ運営、学生教育。PIのみ対象として、「思い描いていたことが実現できていますか」と聞いています。「恨まれていないからうまくいっているのではないか」とか、「社会に出たあと教え子が幸せにしているからうまくいっているのではないか」という結果論的なところで、大丈夫だったのではないかと感じている人たちもいるかなと思います。やはり「学生がなかなか進学してくれないのでうまくいかなかったのではないか」と、結果を見て考えている人もいるかなと思います。でも、頑張っているということは「何かやったら褒める」とか。あとは、「自分自身のやり方を一

番当たり前だと思って学生と接していたというのをやらなければよかった」と、あまりよくなかったと反省しているケースもありました。

今はそれぞれの人たちがそれぞれの考え方で研究を遂行していくということはありますけれども、わからない人にはちゃんと道を示すことが大事だと思います。それぞれの人たちを尊重しながらラボ運営をやっていくというのはお互いにとってすごくハッピーなのかなということ、いろいろ複数のコメントを読んで感じていたことではありました。なので、「工夫やルールに縛られるのではなく個人の人生を大事にする」という、非常に重い言葉ではありましたが、そういうところについて皆さんと、隣のラボがどういう運営をしているのかということ、何をシェアできたかなと思っています。

だいぶ時間が押してしまいました。この辺で私の話は終わりたいと思います。最初にお話ししましたけれども、このセミナー自体、何か結論をつけたいというものではありません。研究は終わりのない旅のようなものですので、隣の人が何をしているのかを見ながら、それを持ち帰って、うちのラボでこれからどうしていくかなということを考えていただければいいのかなと思います。まだまだ終わりません。ここからパネルディスカッションに入っていきたいと思います。

アンケートの詳細版は、ここで紹介したもの以外にもたくさんあります。分子生物学会のホームページに掲載していますので、ご興味のある方はご覧いただければと思います。多くの方がアンケートに協力してくださいました。ご回答いただいた皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

それでは、恒例のパネルディスカッションに移りたいと思います。パネリストであるキャリアパス委員をご紹介します。皆さん、拍手でお迎えください。東京工業大学、木村宏先生。慶應義塾大学、岩崎由香先生。学習院大学、菱田卓先生。東京医科歯科大学、井関祥子先生。大阪大学、石谷太先生。山口大学、島田緑先生。この6人のメンバーでパネルディスカッションを始めたいと思います。皆さん、どうぞよろしくお願いたします。

皆さんと双方向な議論をするためのツールとして昨年続いて「Slido」を導入いたしました。こちらのスクリーンに表示された URL か QR コードからアクセスし、アクセスコード「221201」を入力します。会場内の皆さんのほか、オンラインでもご参加いただけます。参加形態を問わずスマホかタブレット、PCからもアクセスが可能です。

また、コメントには「いいね」することができます。ぜひ「いいね」してください。人気順、「いいね」の多い順にソートもできるのですが、皆さんセッションの流れでコメントしてくれると思いますので、新着順に表示するため「最近」というほうで閲覧されることをお勧めいたします。

次に設問への回答方法ですが、本セミナーでは十数問の設問をご用意しています。進行に合わせて設問画面を表示しますので、皆さんは投票・回答をお願いします。投票の状況を見ながら、皆さんの投票が落ち着いたタイミングで締め切らせていただきます。

締め切ったあとの回答結果と Q&A からのコメント一覧は、皆さんの端末から見られます。今回、オンラインでご参加の皆さんも「Slido」をご利用いただきますので、Zoom Webinar の Q&A とチャット機能は使用しません。予めご了承ください。

それでは、早速アンケートを取りたいと思います。最初に、セミナーにご参加の皆さんの属性からアンケートを取っていききたいと思います。練習問題1「あなたの属性を教えてください」。

いかがでしょうか、投票が落ち着いてきたようなのでこちらで締め切ります。事前アンケート回答者の分布と比較しますと、だいたい同じぐらいかなと思います。どうもありがとうございました。

続きましてアイスブレイキングというか、温めるためにも本セミナーにご参加いただいた理由もお尋ねしたいと思います。練習問題2「あなたが本セミナーに参加した理由を教えてください」。

「内容に興味があったから」、それはうれしいです。「ランチが食べたいので」、これも大事です。どうもありがとうございます。

それでは本題に入ってまいりたいと思います。最初の設問です。事前アンケートでもありました研究室のコアタイムについてもう一度伺いたいのですが、ちょっと聞き方を変えまして、ラボに滞在することが期待されている時間はありますか。あるとすると、それはだいたい何時間ぐらいですかということでお伺いしたいと思います。

「ない」方が多いですね。コアタイムについてですが、パネリストの先生方、この結果を記憶していただきまして、もう1つ聞きます。コアタイムにどんなメリットがあると思いますかという質問です。コアタイムがない方もメリットがあると思ったら、そちらをお答えください。3つまで選択可になります。

「コミュニケーションを取りやすい」とか、「質問がしやすい」とかアクセスしやすいとか、そういうことがあるかと思います。結構「防犯／防災上安全である」があるかな。最近は電気代も上がっているので、土日もできるだけ電気は使わないでくださいみたいなことを大学事務の方から言われたりするんですけど。

それでは、ここでパネリストの先生方からコメントを伺っていききたいと思います。島田先生、この結果はいかがでしょうか。

○島田緑 設定はしていないという方が多かったと思うのですが、やはり実験を指導する上で必要な時間というのはありますし、またコミュニケーションが研究の進展に重要だと思うので、常識的な範囲でラボメンバー全員が同じ時間帯にラボにいるということは必要だと思います。また、皆さんが答えてくださっているように、「研究室メンバーとのコミュニケーション」が一番メリットが大きい、2番目が「生活のリズムを整えやすい」だったように、やはりメンバーとのコミュニケーションというのはすごく重要ですし、また学生の中にはどんどんと夜型になっていって、最終的に来られなくなるということもありますので、生活のリズムを整えるという意味でもやはり日中ラボにいる時間が必要ではないかなということで、緩いコアタイムというのは適宜必要な場面において設定していくのがいいのかなと思います。

○司会 ありがとうございます。木村先生、いかがですか。

○木村宏 私は理想的にはコアタイムなんかなくても、みんな普通に自由に研究するというのがいいんじゃないかなと思っていて。あと、コアタイムを設けている皆さんに伺いたいのは、来れない学生とかがいた場合どうしているのですか、ということです。何回も「コアタイムだから来ましょう」と言っても来れない学生がいた場合、それはそのまま放置すると他の学生にも影響が出て、「あ、コアタイム守らなくていいんだな」と思うのだけど。でも、それでも来れない学生に「あなた、クビ」というわけにもいかないじゃないですか。皆さん、どうしているのか気になります。倉永さんいかがでしょうか？

○司会 私ではなくパネリストの先生方で、ここはこういうふうにする方がいいよというのはありませんか？ では最初に石谷さん、お願いします。

○石谷太 今のところ出てこない学生さんというのはいないのですが、やっぱりルーズな学生さんは存在すると思うんですね。そうした子たちには、基本的には僕は「自己責任で」と言うし、「来たほうがいいんじゃないかな」という言い方をします。でも、やっぱり「自己責任で」と言った上で、さらに研究の進捗とか、みんなと比べたときにそういう人は徐々に遅れていくのでそれが目立ってきて、たぶんそういうことで気づいてくれるのではないかとと思っています。例えば僕もすごい夜型で一人で実験したいというタイプだったのですよ。アンケートでも「夜中に一人で実験したい」という学生さんがいっぱいいました。分子生物学って一人で実験できることがめっちゃくちゃ多いと思いますが、実験が全てではなくて、やっぱり新しいクエスチョンを見つけることとか気づきみたいなことが大事だと思っていて、そういうことでいろいろな人とコミュニケーションを取るのがよいですね。なので、コアタイムとは言わないけども、人と一緒にいろいろな議論するのは大事かなと思います。

○司会 確かに、そういうことをシェアするというか、共通認識を得るのがすごく大事ですね。

○井関祥子 いいですか、ここにコメントで50代のPIの方が「コアタイムはPIではなくスタッフが勝手につくったけど、基本的には守られていない。守られていないことを許容することでコアタイムがあることが効果を発揮している」。これはそうかなと思うんですね。やっぱりないというか、私なんかは「10時までには来てくださいね」と。用事があるときにとにかく捕まらないのが困るからと思っているだけで、3時間とか、そういうのではなくて、緩やかなものはあったほうがいいのかなと思います。

○司会 ありがとうございます。どういうふうにしているというのはコメントでも出てきていて、「こんこんと説得するけれども、最後は力尽きます」とありましたけど。菱田先生、どうぞ。

○菱田卓 コアタイム、もともとあったのですが、今はコロナ禍でないのですが、やっぱりあったほうがいいかなと思っているのは、研究生活が皆さん同調できるというか、スタートがある程度同じになって、同じ時間を共有すると、やっぱり先ほども言いましたけどコミュニケーションとか、そういう面で結果的にいろいろいいことがあるのかな。ただ、コアタイムを厳しくしすぎると、例えば「10時に来てくださいね」と言って10時半に来ると、何かそっと入らなければいけないとか、帰りたいのに帰れないとか。そこら辺の厳密度はちょっと緩くしたほうがいいのだけど、そうすると先ほど木村先生が言われたように結局来ない学生とかはどうする？という話があって。全く来ない学生というのはどうしようもないんだけど、それは。でも研究室の中で、そういう人は全体として共有しているのではないかな。まあ、しょうがないよね、と。だから、ちょっと乱れがちな人にとってもコアタイムはいいのかなと思います。

○司会 そうですね。割と個人的にサポートが必要な学生というのはどうしてもいるかもしれないのですが、ある程度共通認識としてそれを捉えていて、それぞれの個人のやり方というか、個人の気持ちの整え方にも合わせつつ、というようなかたちなのかな。ただ、共通認識として、それを必要としている理由をある程度皆さん理解しているのが大事なのかなと思いました。全て自由というのも一つはあるのかと思いますけれども、そこら辺はコミュニケーションがすごく大事ですよということですね。

話がこれで全部終わってしまいそうな感じですが、せっかくなので次に行きます。それでは次の設問にまいりたいと思います。テーマがちょっと変わります。研究ディスカッションについてです。研究ディスカッションの方法や頻度とかについて、皆さん3つまで選択可です。それぞれの研究室でどういうミーティングを実施しているのかについてお答えください。「ミーティング」はある程度時間を決めてみんなで集まってというイメージで書いてあります。「進捗報告」はその都度というイメージで書いてあります。「その都度報告」が多いですね。

一旦これで終わります、そこにプラスアルファの設問がありますので、続けてこちらにも回答をお願いします。こちらは、こういうのを増やしたほうが良いという希望があったら、それを教えてくださいというものです。増やしたほうが有効だと思うものをこの中で3つまで選択してください。参加者の割合としてPIが結構多いと思いますので、「その都度持ってくる」というのは、私自身もすごくうれいんです。この結果を踏まえまして意見を伺いたいと思います。岩崎先生、どうでしょうか。

○岩崎由香 私は、特にルールとして学生さんと接するときこういう頻度でデータを持ってきてくださいとか、そういうことは言っていないのですが、結構学生さんによって、結果が出てその都度報告するのが自分に合っているから、そういうふうにするという子がいたり、1日に例えばウェスタン1回したら、その都度データをみせてちょっと話すという感じが良い子がいたりするので、そのあたりは各自心地いい感じでやってもらうというのがいいのかなと思っていたりします。ただ、そうするとコミュニケーションが苦手だったり、いい結果が出るまで絶対話さないみたいになる子も出てくるかもしれないので、あまり声を聞かないなという子には、こちらから「最近調子どうかな？」みたいな声を掛けていくのも大切かと思っています。とはいえ、私が一緒に研究している学生さんたちも「結果がでたらその都度持ってくる」というスタイルをとる子が多いので、学生さんからしても、それがやりやすいと思っている子が多数派なのかなと感じています。

○司会 ありがとうございます。やっぱりその都度話をしてくれると都度アドバイスができていいなと思いますし、お互いのコミュニケーションにもいいなと思いますけど、なかなか持つてきづらいという学生さんがいたときに、そのときにこちら側からどうアプローチするのか。もしくはミーティングを設定したら、それに向けて準備する学生もいるのかなと思いますけれども、これについて何かこういう工夫があるというパネリストの先生がいらっしゃったら、ぜひコメントをお願いします。

○石谷 工夫と言えば、僕もやっぱり基本的に週に1回のディスカッションを設定していて、都度わからなくても困ったらすぐに来てくれというふうに伝えていて。一方で、忙しいので目が吊り上がってこんな感じになっているときがよくあるのですね。そういうときに困るというふうに言われるので、「とにかく目が吊り上がっていても言うだけは言ってくれ。その瞬間「5分待ってくれ」と言うかもしれないけども、そのときちゃんと聞いてあげるので必ず来て」というふうにはしています。一応教授室はちゃんと戸を開けて、入ってすぐのところに待ち構えているようにしているので、ちらっとのぞいたら来れるようにしています。

○岩崎 もしかしたら、あとで出てくるかもしれないですが、そういうときの声掛けの切っ掛けとしてSlackがよく機能しているなと思っていて。割と学生さんからも「ちょっと時間、いいですか」とか、「こんなデータがありました」みたいなのがSlackでピロっと送られてきたりして、そうすると目が吊

り上がっていても落ち着いて、一息ついて話しかけに行けますね。Slack を使うと話しかけるタイミングを見計らうハードルが下がるような気がします。

○石谷 ありますね、うちも Slack のダイレクトメッセージで「今、いいすか」という感じで来てくれるので、「いいよ」と気楽に言えるのがすごくいいですね。

○司会 ありがとうございます。次の設問のいい感じの導入になりました。まさに今のお話にありました、設問5になります。研究室メンバーとのコミュニケーションツールについてお尋ねいたします。日常の連絡手段としているもの、学生さん、指導教員、皆さんご回答ください。学生の場合はあなたを指導する立場の方と、学生以外の学生を指導する立場の場合は学生と、日常の連絡を取るときにどの手段を今使っていますかということです。コロナ禍でコミュニケーションツールはすごく増えたかと思いません。そこでどういうツールを使ってやっていますかということの質問になります。

やっぱりコミュニケーションということで直接会話することも多いかなと思います。菱田先生、何かコメントをいただけますか。

○菱田 私はたぶん昭和、平成と変わらず対面が一番で、あとメールですね。例えば「論文、これを見たらいいよ」というときはメールをします。だから、それ以外のいろいろなツールをむしろどういふふうに使っているのかなと聞きたいなとか。メールと LINE で大きな違いは、相手の「既読」がつくかどうかだと思うのだけど。そこは学生さんにとってはきついのではないかと僕は思うのだけど。そうですね、ぜひ他の活用方法を僕も知りたいなということです。私のところはほぼ対面ということで、それではいなければメモに残したりとか、非常に古風なやり方でやっております。

○司会 ありがとうございます。さっき石谷さんと岩崎さんで Slack のいい使い方についてお話をされたと思います。Slack は「既読」がつかないので、見たかどうかわからない。あとは、最近はメールでも時間を決めて配信ができるんですね。なので、夜中に送っておくとちょっとプレッシャーが掛かったりするケースもあるのですが、朝8時とかに設定しておいて8時に送ることもできるので、そういう使い方もあるのかな。他にうまいツールの使い方についてコメントがあったらぜひお伺いしたいのですが、いかがですか。木村先生、何を使われていますか。

○木村 基本的には直接がいいのですが、いない場合があるときはメールとか、夜なんかは。それと Slack ですね。うちも導入していて、使い始めると思ったよりもいいです。

○司会 結構 Slack を使っている人が多くなっているかなと思います。

○石谷 今、「Slack、自動消去困っています」という話があって。やっぱり皆さん、フリーの方が多くいると思います。Slack も使うけどもメールも二重でやるとか、そういう工夫が必要ですね。

○司会 何かうまいログを残していくやり方があればよかったですけれども。なかなかシステムの変更がありまして使いにくくなってまいりました。いいものがあつたら、ぜひ教えてください。

それでは、続いての設問に行きたいと思います。設問6と7では、学生さんを指導する立場の方と学生さんとで、よいと思う連絡手段のギャップがあるかを探ってみたいと思います。今、メールとか対話とかLINEとかSlackとかいろいろありましたけども、ギャップがあるかどうかの赤裸々な結果になるのではないかと、ちょっとドキドキしますけども。

まずは、学生さんを指導する立場の方のみお願いします。「学生と日常の連絡をとるときに一番よいと思うのはどの手段ですか？」という質問になります。あとで学生さんには聞きますので、学生以外の学生を指導される方々がどれが一番やりやすいなと思っているかについてお伺いしたいと思います。

75%、「対面」がやっぱり多いですね。メールも、ログが残るという点では確かにメールもいいですね。最近私、メールのどこに何をしていたのかの検索能力がすごく落ちていて、本当にいつのメールだったか、どこに行ったかが全然わからなくなってしまって、ちょっと「find」の機能も高感度過ぎて関係ないメールも引っかかってきて結局必要なものがなかなか探し出せないという、ちょっと困ったことになっています。

では、今度は学生さんにお答えいただきます。「あなたを指導する立場の方と日常の連絡をとるときに一番よいと思うのはどの手段ですか？」。「これを使ってもらったらいいんだけど、なかなか使ってもらえないんですね」みたいな。

「直接対面で話をする」のはどちらも、これは双方向にそんなにギャップがないということですね。「メール」が意外と少ない。私たちはメールを使うケースが多いですけど、「メール」はそこまででもないですね。メールだと埋もれてしまったりとか、書くのに書き出しに結構緊張するというのは学生から聞いたことがあります。「何々先生、前略……」とか。

だいたい出そろいましたのでパネリストからコメントをいただきたいと思います。井関先生、いかがでしょうか。

○井関 皆さん、対面ということですのでごくよかったと思います。本当にコミュニケーションが大事だというのは、もちろんコミュニケーションしたくないという人もいるとは思いますが、本当にそこが共有されているのだなと思いました。学生さんはSlackが多かったのですが、私はSlackを上手に使いこなせていなくて、メールで「Slackに入れましたけど」と言われることがあります。すみません、Slackをもうちょっと、毎朝、立ち上げるようにしたいと考えております。

○石谷 やっぱり僕も最初はずっとメールを使い続けていたのですが、さっきも「既読」の話があったと思いますが、最初は絶対にやらないといけない連絡事項をみんなに送ったときに「必ず受信したと返事しろ」というふうにやっていたのですが、それもちょっと厳しいなと思っていたのです。LINEも既読のように見えて、実は既読ではなかったりするケースもあって、Slackはやはりボタンを押すという作業があるので、かなりいいですね。「既読」がついているのにちゃんとやっていないやつがいたら、見ていたのにどうしたんだということも言えるので、Slackの全体への連絡はいいと思います。一方で、研究の話とか相談とかはやはり対面のほうがいいと思うので、すごく対面の重要さはあるのではないかなと思います。

○司会 どうもありがとうございます。コメントを見ていくと、「スタンプをやっているのかどうか」、「スタンプがあると楽だね」というのが結構あります。LINEもスタンプが押せる機能が付いたのです、それぞれに。確かにこれはいい機能だと思いますけれども、それぞれのコンセンサスを得ておいたらい

いのかなと思います。「スタンプでいいよ」というケースと、「スタンプなのかい」というケースはあるのかなと思います。島田先生、何かこのツールについてコメントがあればぜひお寄せください。

○島田　うちでは対面とメールが主流ですが、LINE もたまに使っています。ラボの連絡には Slack は使っていないですね。LINE だとあまり軽すぎて、それがいいのか悪いのかちょっとよくわからないなというところもありますし、学生さんによってはラボのグループラインに入っていない場合もあるので、うまく使い分けて使っています。Slack も使ってみたいなとは思っています。

○司会　LINE はなかなか距離感が難しいところがあるのかなと思いますね。Slack はちょうど中間ぐらいでいいツールができたなと思いましたけど、有料版になったので少し大変ですよねという、あるあるで共有できました。ありがとうございます。

○木村　「LINE だとやっぱりプライベートになってしまいそうで嫌だ」という意見が多いのは、たぶんそうだと思うのですよね。だから、どっちかというとなら LINE よりも Slack に流れたほうがいいんじゃないかと思いますし、LINE は通話もできますけど、Slack も通話ができるのですよ。だから、LINE を使う理由はたぶんなくなっていくのではないかと思います。そのほうが安全だと思います、みんなにとって。

○菱田　研究室の学生の中では LINE があるのです。僕、入れてもらってないだけで。

○司会　私もです。

○菱田　多くの学生さんは LINE でやっていて、だから僕はそこの誰々に言って、「LINE で回して」というようなことは言うことはありますね。

○司会　そうですね、グループでやっているのかなと思います。もういい感じに温まってまいりましたので、続いて設問の 8 と 9 に行きたいと思います。コロナ禍で試行錯誤してきた研究室のイベントについてです。皆さんにお答えいただきます。まず、設問 8 です。「コロナ禍以降に実施（復活）したイベントはありますか？」という質問です。研究室メンバーとの研究以外のコミュニケーションですね。ラボ旅行とか、一緒にご飯を食べるとか、飲み会とか、そういうことになると思います。コロナ禍以降に実施（復活）したものはありますか。複数選択可です。お昼ご飯を一緒に食べるとか、対面での雑談、それは結構復活しているというか、やっているということはここまででもわかってきたのですが、飲み会どうしていますか、ラボ旅行どうしていますか、スポーツしていますか、みたいな、そういうところについて隣のラボの事情を聞いてみたいなと思っております。

確かに、人目を気にせず早くラボ旅行とかしたいですよ。飲み会とかはあったのかなと思います。ここで一旦終了しまして、次の設問にも関連したものというか、同じものなのでお答えください。「研究室メンバーとの研究以外のコミュニケーションについて、どのようなものが研究室のアクティビティを上げることに重要だと思いますか？」という質問です。同じ選択肢になります。どれは大事だと思いますということで、復活していないけれども、これはぜひやってくださいということですね。

「対面での雑談」は毛色が違いますね。アクティビティとはちょっと違いましたね。それ以外のところも見ていただきながら、1番は「雑談」ですけれども、ラボ飲み会はあったほうがいいかなという感じになりそうですかね。島田先生、これについて何かコメントはございますか。

○島田 私も対面での雑談というのはすごく重要だと思いますし、先ほどコメントでもあったのですが、ネガティブなデータが出たときに気軽に話しかけられるような雰囲気が必要というか、そういう雰囲気になってほしいみたいなコメントもありました。私のラボでは人数が少ないということもあるので、すけれども、ほとんど毎日のように結果を見せてもらって、それについてディスカッションするというような時間をつくっています。なので、対面で雑談というのは十分にできているのかなと思うのですが、一方でラボのメンバーが多くて十分にはできないとか。普段PIの方というのは忙しいので、あえてこういうイベントがあると、例えば飲み会などのイベントがあると、そのイベントを通して普段ではできないような交流を持って、それが本音で日々ちょっとした抱えているような悩みとかを比較的小さい段階から発見してあげることにつながるのかなと思います。ラボの飲み会というのは私自身すごくやりたいのですが、ずっとやれていなくて、やっぱり食べながらとか飲みながらコミュニケーションをするということによって、実は私自身が学生さんに対して思っていたことと学生さんの意見がちょっと違うこともよくありますので、そういうことで改めて関係をつくりあげることができるのかなと思います。

○司会 ありがとうございます。井関先生、いかがでしょうか。

○井関 コミュニケーションを取る、これはそうかもしれませんね。「教員なしでも学生が飲み会をしている」場合には恐らく、菱田先生、大丈夫だと思うのですが、どうでしょうか。

○菱田 ただ、現実的にはお酒がすごく好きな学生さんとそうではない学生さんがいるので、代によって全然飲まない代もあれば、研究室の片隅で飲んでいるようなこともあります。

○井関 話がそれてしまうかもしれないですけど、私は下戸なのでほとんど飲まないですけど、飲み会に参加しています。どうでしょうか、菱田さん。

○菱田 飲み会、コロナになって全然やっていなかったですよ。それでコロナの年かな、その人の本当の顔を見ずに卒業していった人もいます。本当の顔というか、ずっとマスク顔しか見なくて、それで卒業して行って、飲み会もなかったのが本当に残念で。そういう子が今になって「飲み会しましょう」と言ってくれたりするので、卒業してから、それが非常にうれしいですね。

○司会 ありがとうございます。自由記述のコメントでも、「飲み会がなくなってよかった」という意見もあって、なかなか行かなければいけないというのがストレスだったというケースもあったのですが、そこで得られるものも結構あるのかなと思います。「禁酒でよかった」というケースもあるので、健康のためにはよかったという大人の見解もありました。そういうところもいろいろ善し悪しはあるかなと思います。

いよいよ終盤に入ってきました。あと 2 問になります。もう少しお付き合いください。「コロナ禍で始めたこと、より充実したことはありますか?」。また毛色の違う質問になりますけれども、私がこれ気になって聞きたかったので。宅トレとか料理、事前アンケートで「SNS」という回答が多かったので。SNS って何をやっているのだろうと思って、私はちょっとわからなかったのです。ちなみに私はテニスを充実させまして市の大会で優勝したりもしました。木村先生、コメントください。

○木村 「SNS」はたぶん Twitter とかそういう手軽なやつでしょう。7「家族と過ごす時間」が多いというのが結構健全な感じでいいですね。これはよいことで、他はあまりよいことがなかったのではないかとというのが現実的だと思います。

○司会 解説ありがとうございます。菱田先生、お願いします。

○菱田 コロナ禍がきっかけでとなると私は自転車ですね。いつも大学まで電車で通っていたのですが、15 km あるので往復で 30 km だから、自転車でここは一気にやっちゃえと思って、それはすごくよかったですね。いろいろな街が見えたりとか、実は車と同じ時間で着いてしまったりして。これを話すと「すごく健康的でいいですね」と言われるのですが、一方で、実は股関節を痛めましたし、腰も駄目になったので、体はむしろボロボロになっていて、健康にはあまりよくなかったのかもしれませんが。もう一つ、いろいろコロナ禍だから、まさにこの質問を自分にして、何かやろうと思って家の中でも庭の木の手入れとかエアコンの掃除とか料理とかいろいろやってみて思ったのは、そう簡単ではないなということと同時に、やってみると結構面白いのですよ。だから、何でもかんでも豊かになるとお金で解決するというか、いろいろサービスでというところがあるのだけど、それを自分でやってみると意外と面白いなという発見がありました。

○司会 ありがとうございます。結構家族とか自分に向き合う時間ができたというのはすごくよかったのではないかと思います。それでは時間が迫ってきましたので、最後の質問に行きたいと思います。

「with コロナ時代」の工夫についてです。「研究アクティビティを維持するために今後どのような工夫をしたら良いと思いますか?」ということです。研究スタイルをできるだけ早く以前のものを復活させるとか、オンラインの利点を残しつつとか、リモートも活用してとか、いろいろあります。上から読んでいただいて複数選択可ですのでチェックしていただければと思います。後半はプライベートの話が出てくるので少し誘導的なところもありましたけど、それぞれのプライベートな時間も大切にしつつ、コミュニケーションをしっかりとっていくということもすごく大事ですね。特にコロナ禍で少しアイソレートされた環境下にありましたので、私たちがコミュニケーションを取ることに若干飢えてき始めているので、距離感がわからなくなっているところもあるかもしれない。そこはちゃんとコミュニケーションを取っていきましょうという感じもあるかなと思います。石谷先生、コメントをいただけますか。

○石谷 このアンケートでも上位に来ていますが、やはり 3「オンラインやリモートも活用しつつ、コミュニケーションが取りやすい体制を構築する」みたいに、このコロナ禍で身に付けた新しいテクノロジーをうまく使いつつ、やはりそれ以前に大切にしていたこともちゃんとうまく維持しないとイケないなと思いますね。やはり身に付けたテクノロジーというのは月並みですけど、Zoom みたいにオンラインで気軽に国内や海外の研究者とディスカッションできるというのはすごくよくて、今までだったら出

張るか、あるいは Skype とかでやろうかと思っていたのですが、なかなかうまくつながらなかったりしたこともあったので、Zoom になってからすごく気楽にいくようになりましたね。それはすごくいいと思います。一方で、コロナのせいで、さっきもお話がありましたけど、コミュニケーションの取り方がだんだんわからなくなってきて困ってはいるのですが、だから対面でコミュニケーションすることは大事かなと思っていて、僕も結構アイソレートされていて、「あの人、僕のこと嫌いじゃないかな」とかすごく不安になることも時々あったのですが、やはりこうやって皆さんにお会いしてすごくホッとする部分があるので。僕らだけでなく学生さんとかラボのスタッフたちも近くで一緒に話をしていて、実験がうまくいったときに「やったー」「いいね、よかったね」と共有することはすごく大事だと思っていて、一方でうまくいかないときも「困ったの？」と話をするのはすごく大事だと思うのです。そういう密なコミュニケーションはやっぱり維持しないといけないなと思っていて、それはずっと続けていかないといけないことかなと思います。

○司会 ありがとうございます。岩崎先生、お願いします。

○岩崎 石谷先生が言ってくれたことが本当に大正解で、以下同文という感じです。コロナ禍になって急にほぼ 100%オンラインで在宅勤務等を取り入れながら仕事をするという経験を経て、これがコロナ禍前に比べて仕事効率としてどうなのか、ということを強制的に比較できる経験ができました。また、オンラインで仕事をするのを強制されたことをきっかけに、これをうまくまわすための様々な工夫も生まれました。自分や周囲の仕事効率を考えたらうえて、最適なオンラインとオンサイトのバランスもここ数年の経験からだんだん見えてきたのではないかなと思うので、うまくいってこどりをし、新しいスタンダードを作っていけたら良いのではないかなと思います。

○司会 ありがとうございます。ちょうど最後の設問が終わりまして、時間いっぱい、ぎりぎりになったのですが、どうしてもこれを言っておきたいということがあれば、パネリストの先生方で何か。

○木村 私ずっと、毎年これで最後ですと言い続けて、本当に今回が最後になるのでよかった。長年やってきた中で今日の会が一番まったりしていたので、本当によかったなと思います。去年あたりの話の流れから最初のコアタイムとか飲み会というところを考えると、マッチングというのが大事だと思うので、どういう研究室を自分はやっていきますということを明らかにしておくのがいいと思います。例えば、コアタイムを設けているような研究室は「ここからここまでコアタイムです」ということをちゃんとオープンにして「そこに合う人が来てください」とか、あるいは、「コアタイムはないけれど自主的にちゃんとできる人を求めています」など。自分の web でもそんなことは書いてないのですが、それから飲み会についての情報はどうかわからないのですが、コミュニケーションツールとかもできるだけ研究室の PI としてはオープンにしてマッチングをしっかりとするのがいいのかなと思いました。以上です。どうも長い間ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。いい感じで締めさせていただきまして大変ありがとうございました。13 時を回りましたので、これで締めたと思います。いろいろご意見は尽きないと思いますが、たくさんコメントもいただきましてどうもありがとうございました。こちらのお寄せいただいたコメントはアン

ケート結果とともに、分子生物学会のホームページに掲載しますので、そちらのほうもどうぞご覧くださいませ。本日は事前アンケートも含めましてご参加いただきまして、コメントもいただき、アクティブにディスカッションいただきまして、本当にありがとうございました。それでは、これで終了したいと思います。本日はどうもありがとうございました。

[了]